

## 第2回

ながさきハートクリニック 院長 坂井秀章先生

地域の要望にこたえて  
復活の地に『復活』

長崎は坂の町だ。その坂道をレトロな路面電車が走り、横をレクサスが走るという、新旧一体という都市だ。今回の取材は、長崎唯一の循環器専門有床クリニック『ながさきハートクリニック』である。西洋医学が日本に入ったのは長崎の出島であることは誰もが知っている。今でも出島跡地は保存されているが、実際に足を運んでみるとその小ささに驚く。そんな小さく狭い場所からわが国の西洋医学が始まり、現在に至っていることは感慨深い。

JR 長崎駅から徒歩およそ5分の場所にある、7階建てのビルがながさきハートクリニックだ。目の前にはバス停と路面電車の駅もある。九州全般に思うことだが、バスのネットワークが非常に整備されていて、ひっきりなしに次から次へとバス停に現れる。加えて、路面電車も想像以上の頻度で走り回っている。また、クリニックの駐車場も完備されているので、通院にはどの交通機関を使ってもおそらくほとんど苦労しらずだろう。そして、



ここに心臓専門のクリニックがあるということは誰もが一目でわかる仕組みになっている。巨大でリアルな心臓の看板が、心電図波形とともにビルの壁面に鎮座しているのである。しかも立体的な看板だ。一度見たら忘れられない。

インタビューのためカテ室に入るとカテの真っ最中で、コントロールルームでモニターを眺めていたのが院長の坂井秀章氏だった。「さあて、なにからいきましょうか」という坂井氏の言葉でインタビューが始まった。

## ● 新規開業？復活？

坂井氏はまず、このクリニックを開業したいきさつを語ってくれた。氏は元々ながさき循環器病院の院長兼循環器医として腕を振るっていた。しかし、この病院は2006年に買収され、経営方針の大転換でリハビリ病院に生まれ変わることとなってしまったのだ。循環器部門がなくなるのと同時に、坂井氏はスタッフ共々病院を去る。しかし、患者さんをはじめ、地域は腕の立つ循環器医を熱望していた。そこで、氏は自分自身で循環器専門施設を立ち上げることを決意し実行に移す。1ヵ月後の2006





年 6 月、坂井氏は 40 坪の外來クリニックを開院し、いままで診てきた患者さんを中心に診療を行うようになる。そして外來をこなしながら物件を探し、建て替えるビルを 1 棟丸ごと借り上げて開業にこぎつけた。周知のとおり、現在は医療法の改正で有床クリニックを立ち上げるのは非常に困難な状況にある。幸運にも坂井氏は 2006 年 12 月までであった申請期日に間に合い、1 年後の 2007 年 12 月に晴れて有床クリニックが誕生したわけだ。なお、内装についてはすべて坂井氏が受け持ち、事実上、ながさきハートクリニックは氏の設計なのである。

坂井氏の開業というニュースを聞いたかつてのスタッフは、みな坂井氏の下に集まってきた。結果、ながさき循環器病院でのチームがそっくりそのまま現在のチームとなっている。誰が何をどう考えてどう動くのかがつぶさにわかる。集う場所が変わっただけで、最初からスタッフは全員気心の知れた仲間たちである。新規開業というよりも、復活といったほうがふさわしいように思っただけで、復活と「そうですね、救急隊の皆さんも復活と

## ● クリニックを超えたクリニック

開院当初は月 30 例の PCI に耐えられる体制が目標で

あったが、新患が増えるに伴い目標は月 50 例になった。必然的にスタッフの拡充が必要となり、現在は 40 人にまで増えた。有床クリニックとしてはかなり多いほうだろう。面白い点は、カテ室専任の看護師を設けていないことだ。全員持ち回りでカテ室に入るのだから、看護師全員がカテのサポートをできる。いざという場合の訓練が日ごろの診療で行われているようなものだと言っている。施設の設備を見せてもらうと、入っている機材は 64 列 CT や直接変換方式 FPD 搭載アンギオ装置をはじめ、最新鋭の機種ばかりだ。有床クリニックというより、どこかの総合病院の循環器科がそっくり移動してきたようなものだ。心臓血管外科もあるので、外科の機材もそろっている。特に目に付いたのはレーザーで、静脈瘤の焼却に使うという。心臓血管外科医の多田誠一氏は治療の様子を、実際にファイバーを使いながら再現してくれた。静脈瘤自体は死に直結するものではないが、疼痛や美容面での問題が多く、現時点ではオフラベルであるものの需要は高いということだ。

施設面で驚いたのは、実は病室エリアである。まるでホテルのロビーかと思ってしまうような応接セットがすえられている病室階の待合所しかり、和室の病室しかり。和室というのは実はスペース上大変合理的で、付き添いが使用する簡易ベッドの設営など必要としない。ただ布団を敷くだけで済む。「付き添いのおばあちゃんまで正座をしたいという方も多いいんです」とは坂井氏の言葉である。豪華な応接セットに誰もが驚き、口コミで和室が人気となっている。立地上 3 方から光が差し込む建物は、採光部分にも上手く光が取り込めるような工夫が施されているので院内はどこも明るい。坂井氏はアイデアマンである。

## ● TRI との出会い

坂井氏が TRI に出会ったのは 1997 年である。最初は少々戸惑ったものの、当時の患者さんの評判はすこぶる良く、この新しい手技にのめりこむこととなった。当時 TRI は現在のように普及しておらず、坂井氏は安全かつ確実にできる方法を模索していたという。そうした中、多くの同志との出会いがあり、独自のネットワークができあがっていった。それが TRA-net のはじまりである。



また、氏は「TRAの巻」というTRIの教科書を1998年に自費で出版もしている。表紙はモナリザ、その手首にはカテーテルという、インパクトたっぷりの本だ。その本のフルコピーを坂井氏が採用した看護師が持っていたという。当の看護師は、以前の職場で良い本だと薦められたのでコピーして持っていたのだが、著者が坂井氏とは知らなかったという。「何度も読み返した跡があって、非常に感激しましたね」と氏は笑った。

このほかにも面白いエピソードがある。2000年、長崎では出島で始ったオランダとの交流400周年の記念行事を1年かけて行っていた。もちろん医学関連のイベントもある。ふと思えば、TRIを世界で最初に行ったKimney先生はオランダ人である。坂井氏は長崎県と交渉し、2001年にKimney先生の講演会がハウステンボスで開催される運びとなった。長崎とオランダの縁はこのようなところにもあった。「Kimney先生が言うには、」と坂井氏はいったん言葉を区切った。TRIの祖の言葉とは何だったのか。「やはりハウステンボスはオランダそっくりだということです」。肩の力が抜けた。最後を茶目つけたっぷりに締めるのが坂井流である。

## ◎ 64列CTという新しいツールを使いこなす

2008年は1月から4月まででPCI件数は142件、診断カテは160くらいという。PCIと診断カテはほぼ同数といえる。これは64列CTの導入による影響が大きい。CTを導入すると診断カテの件数が減るのは現在の流れ

だが、坂井氏が言うように、CTを撮ることによって、今までカテ台に上ることのなかったいわゆる症状のない人がカテーテル治療を受けるようになった。つまり、PCIの裾野が広がり、PCI件数が増えたと言い換えることができる。

坂井氏はCTを診断カテの完全な代替として使っているわけではなく、いうなればスクリーニングのツールのひとつとして使っている。解析は遅くとも1日とスピードを第一にしているが、精度をないがしろにしているわけではない。CTで狭窄の疑いを見つけ、診断カテあるいはPCIにつながっていく。どのような治療を選ぶかは患者さんの意思に任せ、リクエストされたことに関してはその患者さんに最もメリットの高いものを提供する。

## ◎ Safire という存在

ながさきハートクリニックの血管造影装置はSafire(鳥津製作所製)だ。坂井氏がSafireを使う理由は3つある。ひとつは長く鳥津製作所製の装置を使っていて慣れているということ、もうひとつは直接変換型フラットパネルがもたらすクリアな画質、そしてサービス体制の充実だ。特に、サービス体制については強い信頼を寄せている。ながさきハートクリニックのように1台の血管造影装置を稼働させている施設では、故障して回復するまでに時間がかかることは致命的だ。鳥津製作所のサービスは故障があるとすぐ駆けつけ、徹夜してでも翌朝には直してってしまうという。「そういうメーカーだから、ながさき循環器病院でSafireを導入したのです」と氏は



振り返る。ながさき循環器病院は Safire の 1 号機が導入された病院だった。ちょうど直接変換型フラットパネルが製品化された時期で、デモ機すらなかった時だったのだが、氏は島津製作所のユーザーの要求に答える姿勢を信じて導入を決めたそうだ。導入前に坂井氏は、京都の工場まで出向き、実機をじっくり見て、その場でいろいろ注文をつけている。このとき出た意見は現行機に色濃く反映されているという。

## ◎ 地域への貢献

何事も確実かつスピーディーに行うことが、患者さんが最も喜ぶことだということを坂井氏は痛感している。「接遇の第一番は患者を待たせないこと」。これこそが坂井氏の信条であり、患者さんに慕われている理由である。そして 24 時間 365 日、循環器救急を受け入れられる体制を維持し続けることが重要だと氏は考えている。すなわち、ながさきハートクリニックがこの場所にあり続けることが地域への貢献だということだ。24 時間 365 日をとるために医師 1 人、看護師 2 人、技師 1 人が必ず当直しており、緊急症例に対峙する。

「もっと多くの患者さんを受け入れられるようにして

いきたいですね」と坂井氏。ながさきハートクリニックで働いていること自体が誇りとなるような職場にしていきたいという。すでに、誇りを持って仕事をするという点は、スタッフの様子を見るかぎりクリアしているように感じたが、坂井氏にとってはまだまだ通過点に過ぎないということか。

取材を終え、表に出てクリニックを振り返ると、看板の心臓が拍動していた。しっかり心電図の波形も出ている。LED の光で拍動しているように見せているのだが、この視覚効果はすごい。「今はあの看板、若干不整脈なんですよ」と真顔で語っていた坂井氏を思い出し、ふと笑ってしまった。

原爆という災禍から見事に復活した長崎。わが国の西洋医学の歴史を作ってきた長崎。その地で新規開院というよりも復活再開院という形で立ち上がった、ながさきハートクリニック。今回の取材でのキーワードは「復活」だったのかもしれない。それも、坂井氏の底抜けの明るさと、喜ばせてナンボというエンターテイナー的キャラクターが上手く地域のニーズにマッチしているように思えた。良かれと思うことに対する行動力こそが貢献なのだという坂井氏の熱いメッセージがしっかりと心に響いた。